

(1) アテネの都市化と基層文化

アテネの都市化と基層文化

——「難民」とレベティカ——

— まえがき

この小論はギリシャの都市化にみられる特徴を検討するものである。人口の都市集中という意味での都市化に関する研究は、アテネの社会科学研究所 Social Science Centre Athens を拠点とする研究者たちによって精力的にすすめられていて、私もその成果に依存している⁽¹⁾。

ここでは、これまで私が主たる対象としてきた中東の諸都市および都市化を前提に、それとの対比によるギリシャの考察が試みられている。だが、中東都市との対比が排他的な主題なのではないし、論述の中で大きな比重を占めているということでもない。そのことをまず断つ

ておかねばならない、と思う。

中東の都市という時、私の経験は主としてベイルートとカイロに限られているのだが、アテネもまた、この両市と同じくその急成長をまず国際環境の変化に負うている。勿論、国内事情がそれに連動してのことである。そして、中東都市との近親性が私にとっては発見的経験なのではあるけれども、様々の理由から、論述はいくつかの省略をあえてしているので、飛躍もあり、詳細・懇切な記述はできなかった。充分に説得的ではないことを恐れている。予備的な未定稿の性格を免れない。

アテネの短い滞在を通じてギリシャの^{サブカルチャー}基層文化に僅かながら触れえたこと、および、それが私見によればレヴ

林

武

アト的ないし近東的なものである、ということがこの小論の主題の一つである。この点は、注意してみれば前世紀末以来、研究者や紀行家が言及しているところでありながら、日本では注意されていなかったことではなかっただろうか。そして何よりも、ギリシャ本土では積極的には論じられないところでもあるらしい。そこに、現代ギリシャの、と言うよりも今日のギリシャの特殊な文化情況がある、とさえも言いうるだろう。もっと控えめに言ったとしても、かれらには判りきったことだから公然と論ずるまでもないことだったかも知れない。しかし、その点は、外国人である私、地中海の北岸には初めてフールド入りした私には重要な問題側面であった。

二 都市化とアテネ

総人口の増加 一九七一年四月の国勢調査によれば、ギリシャの総人口は八、七六八、六四一であり、前回比(一九六一年)で四・九%の増加である。

統計局の推計によれば、一〇〇年前の一八七一年の人口は一、四五七、八九四であるから、この間に六・〇一倍の増加である。さらに、一八六一年と一九七一年とを

比較すれば、実に、八倍の人口増加である。

こうした高い人口増加は自然増によるものではない。一八六四年のイオニア諸島の併合に始まり、八一年のテッサリとアルタ、一九〇七年から二〇年までの間におけるマケドニア・トラキア・クレタおよびエーゲ諸島、一九四七年のドデカネス諸島の領有が背景にはある。この種の問題は、今日なお続いており、ギリシャの国境問題は未だ整備されていないことが人口の問題にも反映している、ことに注目すればここでは足りる。

つまり、それは次のところに示されている。この一世紀余りをほぼ一〇年の時間幅で区切ると、三〇%以上の人口増加を経験したことが二回(一八六一―七〇年、一八七九―八九年)あり、一九〇七―二〇年の間には実に九〇%の増加をみている。さらにこの期間には、二三・六%の増加を示す一九二〇―二八年期が続くから、それが如何に重大な社会的転機ないし大変動期であったかが判然とするのである。

第一次世界大戦から大恐慌に至る時期は、どこでも巨大な変化がみられたのではあるが、人口増加に、しかも社会増に、それが重複しているこうした例はまた格別な

(3) アテネの都市化と基層文化

のではあるまいか。この時期のギリシャが経験した社会経済史的な変化については、文献にさえ不案内の今の私には課題として残されているものの、必要な手掛りさえ掴めてはいない。(しかも、この時期が大量の海外移住では同国史上第二期を画している。)

問題を、そこで、都市・農村の人口配分という点からのみ、間接なしかもややフラットな仕方では据えなおしてみれば、次のようなことが言いうる。(1)都市人口の急増が始まり、(2)他方で農村人口の減少がみられる、ということである。だが、勿論のこと、この時点では非都市人口の方が未だ優勢である。それが逆転して都市人口の優位が確立するのは一九五〇年代に入ってからである。一貫して変らないのは都市人口の増加傾向であり、他方で農村人口の相対的減少である。

こうした一般的傾向の中で著しいのは、前世紀以来の三大都市の膨脹、とくにアテネへの人口集中であって、アテネの首座都市化 primacy は二〇年代にすでに確立したと言いうことができる。

アテネの首座都市化 ギリシャの統計書は、集落を三分類して(1)人口一〇、〇〇〇以上を都市(2)二、〇〇〇

以上一〇、〇〇〇以下^{セミアン}町(3)二、〇〇〇以下^{ルイタル}村として^{ルイタル}いる。こうした分類は、それぞれの国による固有の事情があるので、単純な「国際指標」の適用はリアリティをもちえないという意味で有効でないが、一応、人口二〇、〇〇〇以上の都市を一九二〇年(この年から公式の人口統計が利用できる)で見れば、上位二〇都市中に一三市を数えることができる。それが一九二八年には一八市に達し、四〇年に一六市に減じたあと五〇年には再び一八市になる。

しかし、上位三市をみれば、一九二〇年で、五二、一七四の人口をもつのが一市(バトラス)、一七四、三九〇が一市(サロニカ)、四五三、〇四二が一市(アテネ)となっており、一九七一年には、それぞれ一二〇、八四七(バトラス)、五五七、三六〇(サロニカ)、二、五四〇、二四一(アテネ)と成長して、そこに画然たる成長格差がみられる。アテネの首座都市化を指摘する理由である。アテネそのものは、四世紀末のキリスト教化いらいさびれた小寒村にすぎず、トルコ時代にやや盛り返したとは言えアクロポリスの北方一キロ四方ほどの田舎町で、人口も多く見積って精々五、〇〇〇ほどの小集落であっ

た。一八三四年、新生国家の首府に（ナウプリオンに次いで）なつてからアテネの発展は始まるのだが、アテネを首府とすることさえ、「東方問題」がらみで英国その他の列強が対露緩衝国家の狙いをこめての、バルカン諸民族の独立運動に刺戟されたギリシヤ民族主義をテコに、アテネの荒廃をなじるギボンなどに代表される「ギリシヤ狂」philhellènesに後押しされた、ヨーロッパ的な懐古趣味であつたのかも知れない。

独立闘争を戦つたギリシヤ人ではなくババリアの王子が国王になり、かれが、当初予定されていた場所を変更して、アクロポリスの見える現議会の所に王宮を建て、新生アテネを計画的に建設し始めた。その時点（一八三四年）で人口は一四、〇〇〇余りに急成長している。とは言え、一八七〇年でも未だ五万に達しないが、一八九〇年に十一万を越え、一九二〇年になつて三〇万を越える。

こうして前述の大都市人口膨脹期に入るのだが、そこでギリシヤにとつてもアテネにとつても重要なのは「小アジア難民」の流入である。一九二八年の国勢調査によれば、その数は、一、二二一、八四九に及ぶ。

その難民の八一・五％が都市におよび近郊に流入・定着したので、人口の都市・農村配分が大きく変る契機になつて、二〇年に二三・一％にすぎなかつた都市人口を二八年には一挙に三〇・六％に押し上げる。逆に、農村人口は総人口の六一・八％から五四・七％へと、二〇年後には五〇％を割るに至る道程をこの時から開始する。
セミアバン町の地位は安定的に一五—一四％台を約三〇年にわたつて保つたのと著しい対照をなしている。

合計で、総人口の二五％に相当する難民人口のうち二二・九％に達する二四五、〇〇〇がアテネおよび近郊（今日の首都圏）に定着した。

これが同市をして、第二位都市サロニカを大きく引きはなし、サロニカの三倍以上の人口をかかえさせる転換点をなしている。サロニカ市さえこの間に四四％の人口増加をみたものの、アテネは七七％増であつた。一〇〇％以上の増加をみせた都市が三市あるけれども、その三市は人口二万を超えるものが一市（カバラ）だけで、あとは一六、〇〇〇台と一四、〇〇〇台であつて、母体の小ささがギリシヤ都市の序列^{ラシヤ}に変化を与えるほどのことにはならなかつた。（表1、2参照）

表1 ギリシャ都市(人口20,000以上, 1920年以降)の変化

都市名	(年)1920	人口					期間変化率				
		1928	1940	1951	1961	1971	1920-1928	1928-1940	1940-1951	1951-1961	1961-1971
Greater Athens	453,042	802,000	1,124,109	1,378,586	1,852,709	2,540,241	77.0	40.2	22.6	34.4	37.0
Greater Salonika	174,390	251,254	278,145	297,164	297,635	557,360	44.1	10.7	6.8	25.7	35.0
Kavala	22,939	49,980	49,667	42,102	44,517	46,887	117.9	-0.6	-15.2	5.7	4.0
Greater Patras	52,174	61,278	62,275	79,014	95,364	120,847	17.5	1.6	26.9	20.7	16.0
Greater Volos	30,046	47,892	54,919	65,090	67,424	88,096	59.4	14.7	18.5	3.6	4.0
Greater Iraklion	24,848	33,404	39,550	51,144	63,458	84,710	34.4	18.4	29.3	24.4	21.0
Corfu	27,175	32,221	19,988	27,431	26,991	31,461	18.6	38.0	37.2	-1.6	16.5
Komotini	21,294	30,136	31,217	29,734	28,355	32,219	41.5	3.6	-4.8	-4.6	13.6
Greater Kalamata	20,905	28,955	34,891	37,781	38,211	40,402	38.5	20.5	8.3	1.1	-2.0
Greater Canea	24,976	26,604	28,168	33,211	38,467	53,026	6.5	5.9	17.9	15.8	5.0
Larisa	21,084	23,899	32,686	41,016	55,391	72,760	13.4	36.8	25.5	35.0	30.0
Yanina	20,765	20,485	21,877	32,315	34,997	40,130	-1.4	6.8	47.7	8.3	14.0
Trikala	20,194	18,682	18,892	24,605	27,876	38,840	-7.5	1.1	27.7	27.2	39.3

[出所]: NSSG, Statistical Yearbook of Greece, 1955 (Athens 1956), pp. 12-13, Table 10; Statistical Yearbook of Greece, 1961 (Athens 1962), pp. 20-21, Table II: 5; Statistical Yearbook of Greece, 1971 (Athens 1972), pp. 24-26, Table II: 9.

[附記] これは Eva E. Sandis, Refugees in Greater Athens (1973, Athens) p. 180の表を簡略化したものである。

表 2 首都圏人口(1920—71)

国勢調査年	アテネ市		ピレウス市		近郊町村	
	実数	%	実数	%	実数	%
1920	292,831	64.6	133,482	29.4	26,729	6.0
1928	395,892	49.4	192,877	24.0	213,231	26.6※
1940	481,225	42.8	186,542	16.6	456,342	40.6
1951	555,484	40.3	192,626	14.0	630,476	45.7
1961	627,564	33.8	189,728	10.2	1,035,417	56.0
1971	867,023	34.1	187,458	7.4	1,485,760	58.5

※ 1928年にアテネに編入されたベリステリオン、ネアイオニア、ピロン、ケサリアニ、エガレオ、タブロス、ネアフィラデルフィアは含まれていない。

〔出所〕 Eva E. Sandis, 前出書, Appendix II (p. 183). だがその基礎になっているのは, NSSG, Results of the Population Census of April 7, 1951 (Athens, 1958), Vol. I, p. LXII, Table IV: 9; Statistical Yearbook of Greece, 1961, pp. 20-21, Table II: 5; Statistical Yearbook of Greece, 1971, pp. 24-25, Table II: 9.

「小アジア難民」ギリシヤでは(そしてトルコでも時には)今日なお「難民」と言えば、一九二二年以降、宗教的帰属を標識にして強制的に「本国送還」されてきた、多くは「生れて初めて」ギリシヤに到着した人口のことである(トルコではその逆)。

ある調査は、この難民への対策が「極く最近まで」重要な政策課題であった、と記している。Eva E. Sandis, Refugees and Economic Migrants in Greater Athens (N. C. S. R., Athens, 1973) は、一九七一年になって改めてこの問題を調査したものであるが、その冒頭で、「一九二二年はギリシヤにとって一つの時代が終ったことを告げる年である」と言って、「コンスタンチノーブルを首府に戴くギリシヤ国家の建設という数世紀にわたる昔ながらの夢がうたかたと消えた」その年であることを記している(p. 11)。

この著者によれば、ビザンツ帝国の終焉・オスマン・トルコの支配によって「夢」として定着したそれは、「一八三〇年にギリシヤがトルコからの独立を達成した時以来、実現の見込みのあるもの」になったかに思われたものである、という。そして、「第一次世界大戦の時に」

(7) アテネの都市化と基層文化

セーヴル協定で英仏が「スミルナと東トラキア地方のギリシャ統治」を約束したので「ほぼ実現されそう」にさえた、と述べているが、そして、それは多くのギリシャ知識人にも共感されていることに違いないと思われるのだが、そこに多くの問題がさまざまにもつれ合って胚胎している。

第一に、そうした「夢」の現実的・政治的な意味と理由とは何であつたのだろうか。オスマン・トルコ帝国体制の内部崩壊の一部として、崩壊期に共通な圧制に対する抗議をこめたものであるならば、同帝国内の各地（たとえば、とくにエジプト）における独立主権化の動向と如何なる関係に立つものであつたであらうか（それにはアルバニアの問題もからむ筈だ）。この点に関する意識的な研究努力があるのかどうかは今の私には分らない。第二に、それが宗教的に鼓舞された国民主義ないし民族主義の問題であるならば、それはエスノ・セントリックなシヨヴィニズムから如何にして自由になれるのか（ということは、ビザンツ帝国もオスマン・トルコ帝国も多民族国家であつたからに他ならない）。第三に、実現の見込みにせよ、ほぼ実現されそうであつたにせよ、それは

常に列強の「保証」によるものであつたし、それでしかなかった、ということは一体何を意味するのであらうか。そこに、「バルカン問題」および「近東問題」という東方問題の一環に組み込まれた現代ギリシャ国家をとりまく国際環境があり、それに反応したギリシャ国民主義の性格の一端があらわになっている、とみることはできるであらう。

ギリシャ人の「夢」は、列強の老獪な政治的かけひきの餌にされたにすぎないが、それは「アルメニア人問題」と重複しながら、民族自決原則を携えて新たに国際政治に登場してきアメリカの国益追求によってプロックされ、ギリシャ政府と同じ地方に領土権を主張したイタリヤに妨害されて、直接には、英軍艦に護衛されて出兵したギリシャ軍が敗北したことで、そして軍事的に既成事実を作ってきたケマル政権を連合国が承認したことにより、最終的に消え去つたのである。そこにはロシア革命も介在する。

だが、それは中東で旧型民族主義者が第一次大戦に託した夢と同じことでしかなかった。

その悲劇的な結末が、スミルナを中心としトルコ各地

方におきたキリスト教徒への迫害であり、ギリシャ人の一大コロニーであったスミルナを事実上「死の街」にしてしまったのである。

「小アジア難民」には、その迫害の過程で(二二年以前に)、ギリシャ各地に避難し・定着した人びとをも含めるのが例である。その点では、パレスティナの難民問題と一定の親和性と共通性を示しているが、ここではそのことに深く立入ることはできない。

ここで要約しておきたいことは次の点である。(1)ギリシャの都市化に一九二二—二八年は一つのエポックを画していること。(2)その中でもアテネの巨大都市化が促されたこと。(3)アテネの転機は「小アジア難民」の流入に負うこと。別に言うならば、他のアジア・アフリカ諸国がさまざまな時期に例証するように、ギリシャの都市化もまた国際環境の重大な影響を蒙っていること、それが首座都市の成立という第三世界共通の事態に連続していること、が注目されるのである。

三 急速な都市化のもたらす問題

首都圏の変化 今日のアテネは、五〇年代以降、農村

から流入する人口の急増により、ひたすらな膨脹を続けている。アテネは外港都市ピレウスをもち、両者が首都圏の大小二つの核をなしてきたものだが、五〇年代にアテネ・ピレウス連合の地位は周辺町村の人口増大に打ち負かされてしまい、七一年の調査は首都圏人口の五八・五%が両市以外の首都圏町村に収容されていることを明らかにした。

二〇年代の都市流入と五〇年代からのとの明らかな相違は、工業化に伴うものである。アテネは、製造工業の三五%を擁するが同部門全労働力の四五%を占めている(一九七三)、ということからも判るように大企業・大工場を集中させている。統計の示すところでは、総人口比の中の農村での喪失分と全く等しい部分が都市で増加しているけれども、移住労働者の数が仏・独はじめE・C各国と米・加の他に産油国も含めて五七、〇〇〇(一九七三年)にも及んでいるので、見掛けほど単純ではない。都市流入の動機は、(1)よりよい暮らしを求めて (2)仕事を求めて という経済的理由とならんで(3)教育というのが三位までを占め、全体でも圧倒的多数をなしている。(3)の「教育」は地方では未だ初等教育以上の機関が十分

に普及していないこと、ならびに成人層における技能修得・職業訓練への期待までが含まれているのだが、それさえも、間接には、経済的要求の中に入れて差支えないであろう。ついでながら述べておくと、ギリシャの高等・専門教育機関は著しく限られているので入学競争は激甚である。他方で、ギリシャ経済の高度化のためには専門技術者・専門経営者層の不足がボトル・ネックである、と指摘されているのも皮肉なことである。

都市コミュニティの問題 アテネでの経験に即して言うならば、急速な膨脹は都市内に村落住民を堆積し続けている、と言うことを許す状態である程に、アナーキーである。しかも住民活動には、教会活動・学校活動・福祉活動などが知的な文化活動と平行してあるが、調査によれば、流入人口の多くはその何れに対しても積極的な参加を示していない。かれらが参加するのは、そうした在来の都市住民活動ではなく、同郷者団体である。約六、〇〇〇に及ぶすべての村落出身者の団体がある訳ではなく、そしてその全てが長期にわたって活潑であるとも限らない。前出の報告は、組織率一五％という事例を示しているのだが、われわれの共同調査班の発見した「フィ

ロティ村協会」などは、一九二〇年代に発足し、有名無実化のあと、隣村との給水問題をめぐる紛争から軍政権時代に再び活潑化したもので、ある知識人の言葉によれば「ギリシャ随一」というほどの結束を示す組織であるから、これを一般化することは危険であろう。ある人の観測では、先の例ほどではない普通の同郷者団体にしたところで一〇〇には達しないし、大方が幽霊団体化しているのではないか、とのことである。

そこで問題になるのがエノリア *Enoria* (教区) の制度である。今なお消えやらぬ「夢」の鼓舞者である、コンスタンチノープルを「都」と呼びならわした民族主義である聖職者層(かれらは給与を国家から受取るという意味では公務員である)は、都市部ではもはや、住民に対する指導力をもたない。もとうとしない、のかどうかは判らない。今日、五〇〇人を単位とする都市の教区制は選挙権の登録以上に意味をもたない、という鋭い指摘さえある。国民的連帯感情の確立にかつて聖職者が果たした役割についていささかの知識を持っていて、こうした批判を知識分子からきかされた上で、「難民」問題へのかれらの対応を思い併せれば、まことに意外などの感

じを免れないのである。

もっとも、ある調査例 (C. Moustaka, 1964) によれば、在村時には八〇%以上が毎日曜日教会に通ったのに、都市流入後は二一%にまで急降下する、という流入者の側の変化に、エノリーアの無意味化は対応している、とみることができる。だがまた、村でこそ教会は信仰活動以外に諸々の社会生活の分野と関係をもっているものの、その多くを都市では他の機関や施設が分担しているので、教会機能の低下ないし純化は必然である、とも言うことができる。とは言え、何よりも決定的なことは聖職者が住民と第一次的な次元での接触を失っていることである。

そのことを原因とする訳には断じてゆかないのだが、近隣集団が成立していないことは現代アテネに特徴的なことである。勿論、近隣関係が個々に成立していないのではない。だがそれが近隣組織として積み重ねられるには至っていないし、近い将来に見込めるものでもない。それは、教会の問題ばかりか、この国の政治文化および政治史とも深く関わり合っているところであるに違いない。

地方出身者の多くは、都市での生活に相対的に満足していないながらも、情緒的な帰属意識を出身村落に対し

て持ち続けることの理由には、都市に近隣団体が成熟していないこととならんで、周期的にやってくる政治変動に対応する知恵としてのパトロニックライアント関係が地方の共同体(村落とその下枝である部落)に根を張ったものであることを思わせる。

それが宗派別の権力配分に重なるレバノンのようなところでは、階級関係さえ宗派関係に分断されがちだし、また近年の「ベイルート戦争」のように階級闘争さえ宗派戦争として戦われるという事態になるのだが、ギリシヤでは、それが、地方主義(地方間の対立)という形をとると、そのかたわらでは、文化意識ないし国民理想の相違として、*Papists* [Romios] に対する *Ellas* [Hellas] (地方と中央) という形をとって現われてくる。

首都圏の形成 「小アジア難民」が住みついてた当時のアテネの郊外は、今日ではもはや郊外ではなく、その一部は中産階級上層の住宅地にさえ変じている。

独立ギリシヤの首府アテネは、旧市街の北東部、アクロポリスとリカベトス山の間に基点をおいて、計画的に開発された。アテネの中心シンタグマ広場からスタディウ通りと大学通りの二本の幹線道路を介して、「全ギリ

シャの中心」オモニア広場に至るまでのビジネス街は、シタグマ広場から、さきの二大通りと四五度の角度で南に伸びるエルムツ通りが、旧市街と（広義のプラーカ）の外れと接する地点（モナスティラキ）で、オモニア広場から発する大通りとほぼ直角に交叉して、三角形の市街区をなしている。言うなればプラーカに代表されるのが二〇年代以前の旧アテネの住宅区であるならば、この三角地帯のとくに南の方の一画が下町地区を形成していた。この地区は五〇年以降、次第に工業地区化しつつあるけれども、依然昔の面影は残している。（その一角プシリにナクソス島フィロティ村出身者の溜り場になっているカフェ「ナクソス」がある。）

一九二〇年の「小アジア」難民の過半数はそうした既存都市部に定着できず、政府および国際救済機関の援助で当時未開発の地域であったバングラティ、ボダラダス（現在のニアスミルナ）ケサリアニなどの地区に掘立小屋を建てて棲みついていた。このうちバングラティは最初に本建築の家屋ができ、ニアスミルナの建設（一九二六年）はスミルナからの難民の一大団体がローンで着手したものだという。

二五万に及ぶ尨大な流入人口を、五年ばかりの短期間にアテネ・ピレウス（とその近郊）が突如として収容することとなれば、その衝撃は、政治的ならびに経済的には無論のこと、社会的緊張や文化的な摩擦も決して小さいものでないのは当然である。一例をあげれば、この難民地区がギリシャ共産党成立の拠点となるし、また一部の製造工業の起点ともなった。住宅事情の劣悪・衛生問題（伝染病の続発）・不完全就業と貧困の堆積という旧難民地区のマイナス・イメージが今日なおこれら地区の住民に対する区別意識ないし差別感情を拭いきってはおらず、不動産価格にも反映している。

四 文化摩擦

1 難民の文化問題 ここで問題にするのは小アジア地方からの難民のひきおこした摩擦のみである。バルカン諸国その他からの問題はとり扱わない。

この問題は、ホールデンが指摘しているように、⁽⁴⁾ ロミオスとエラスの対立の問題であるが、同時に、ディモティック *dyiotiky* と公認・公用語文化カサレプサ *kasapá*、*peioúsa* の対立の問題でもある。しかも、それだけに止

まるものではない。問題視角を異にしたところでは、日常生活における聖俗の対立・併存および価値感覚とも重なるところである。社会的・集団的な習俗と行事の場においても、民族的・地方的な文化にかかわるものとしては、エリートとマッス・都市と地方（村落）の生活様式の相違に重複した文化的願望や規範意識の対抗的併存の構造問題としても立ち現われている。

難民がもたらしたのは、結局はそれに収斂されるものではあるにしても、それに新らたなしかも異質の要素を追加するものであった。

しかも、その地点がアテネ・ピレウスであったということが重要である。

ここで私は（近東の文化と社会を念頭に）注目するのは「難民」が持ち込んだ「非ギリシャ的な」音楽文化である。かれらの持込んだこの音楽文化にしたところで、確かに新しくはあったにせよ、全く耳なれないものだったのではない。トルコ時代にバルカンのものと同化されながら庶民のなかに滲透していたものでもある。この限りで言うならばトルコ起源の影絵芝居 *kaygıncılık* がすでにその少し前の時期に入っており、通俗な教訓話も

さることながら、時事的・時局的な問題を軽妙痛快に諷刺・戯画化することで広く大衆に愛好されだしたのが、トルコ起源の新しい音楽が入ってくる直前である。（ちなみに、第一次大戦頃の、有名な旅行案内書がエジプトの慰めと楽しみに挙げているのが影絵芝居である。今日ではもうエジプトでは見られないが、インドネシアとマレーシアでは保存されている。）

名人と称されたある人形師（影絵芝居の人形作者、兼上演者）の自伝によれば、その社会的評価は低く、堅実な市民・生活者とはみなされないことが多かったようである。⁽⁵⁾

「難民」が持ちこんだ音楽は、影絵芝居と同じく、エリートの文化的規範とこそは合わなかったが、アウトロー的であるという意味では、影絵芝居を愛好する農民や都市大衆からも新しい音楽は当初は愛好されたものではなかった。しかし人形師と新しい音楽演奏者たちの間には強い人間的共感があったらしい。それは明らかに都市細民の連帯感情というべきものではあるが、中産階級の層が薄く少い都市社会の底辺あたりを同じく漂うにしても、堅実な職人層は（とくにその中でも優秀な技能者は

ど) 文化的には保守的なのが普通で、都市に流入してくる農村から人口もこの点では生活感情を異にしているの
で、異なる集団的反応をみせる。

だが、さきの名人人形師の場合のように、都市(下層に)育ったものの場合には特有の文化を身につけるのが普通である上、ギリシャ風の粹に似た美意識、または名誉感情と結びつくときには独特の基層文化を開花させる。それが影絵芝居か音楽かを問わず、その限りではインテリと農民らのエラス的かつカサレブサ的な文化に対抗するし、とくに一種の人格理想・活動模範を確立して男の「矜持」にまで高められてゆくことで完成される。それがマンガス *paghos* でありレベティス *pepetis* である。

そのことが体制的ならびに既成の理念と衝突する。

この摩擦は、とくに「小アジア」からの難民が持ち込んだ習慣の相違で著しくなる。スミルナやコンスタンチノープル(イスタンブール)では、ギリシヤ人は家族連れで、月に数回も、夜分、音楽をきき食事をしに外出するのが普通のことであった。しかし、ギリシヤ本土では、アテネやピレウスでさえ、最も西欧的な意味で洗練された極く一部の人口を除けば、それは馴染のないことであ

った。夜間の外出は成人男子だけのものではあった。

一九二〇—三〇年代には、都市で夜間の社会生活が新しい局面を展開させ始め、様々のタイプのカフェがアテネとピレウスに簇生して繁盛した。音楽を演奏する店や影絵芝居(屋外にスクリーンを張るので夏だけの興業であった)を客寄せに上演するところもあった。そういう風潮のなかで一人の天才的な人形師によって歌と影絵芝居の組合せが新しく生れた。

前者にアマン唄のカフェ *aman* やカフェ・シヤンタン *café chantant* があったことを、現代ギリシヤ音楽の研究者は伝えている。⁽⁶⁾ このアマン唄は、歌詩の終りに「アマン、アマン」という繰返しを入れるところからそう呼ばれるようになったもので、言うまでもなくレベティス(↑ *tribe*)と同じくトルコ起源の言葉である。

「スミルナの大虐殺」という事件がギリシヤ人にとって動機や経緯とは別に未だ確たる国民的記憶である時期に、このようなアマン唄が流行し、レベティス讃歌がたとえ一部にもせよ根づいたのは、かげにスミルナをふくむトルコ各都市での生活への追憶と感傷がこめられていたにしても、エラス派の反撥を招くのは自然であった

あろう。

それをきき、歌い、演奏したのが「難民」ばかりであったかどうかは判然としないけれども、スミルナ出身の音楽家が紹介し普及させたものであることは紛れもない。そして、かれらの演奏技法と音楽理論（の知識）が今日風に言えばアングラの演歌にもあたるレベティスの歌「レベティカ」*pejeticica* を誕生させ発展させるのであった。

とは言え、「カフェの音楽はレベティカだったのではない」ことに、両者の重複を認めながらも、ホルストは注意を喚起している。⁽²⁾ まさしく、レベティスは「難民」に限らなかったし、「レベティス」の存在は「難民」の強制送還より古いからである。にもかかわらず、両者には共通点がある。西欧風の近代化を進めようとする新興国ギリシャの官製モラルや法に馴染まないことである。アマン唄の演奏者たちを含めて、多くの難民はトルコ在住の時代にハシーシに馴染んでいた。しかもハシーシによる神経の興奮は音楽の演奏に確かな効果をもたらしたし、また聴く方にも同様であった。勿論、こういう東方的ないしトルコのな薬物は禁制であった。音楽の演奏

者もきき手も、その禁を犯すことが多かったとしても不思議ではない。エラス派のエリートが、それを非ギリシヤ的なものだという「明白な理由で」峻拒・厳禁して厳罰で臨もうとも、ギリシヤにはすでに高名な産地（シロス島）があり、ロミオスたちはとうに親しんでいたのである。それはアルコールに代る（または併用されて）酩酊作用が水煙草に和わせて楽しまれたのである。ここに、都市窮民化した難民（の新しい生業）と都市細民ないし（教条的に言えば階級的に無性格な）ルムベンプロレタリアートであるレベティスとの間に融和の契機がある。その共犯者性が近親感をもたせるのである。悪しき習俗は（恐らく専売制度とどこかの一点で接触する筈だが）権力をもつてする投獄・収監という代価を強要されたのであるが、監獄でこそ放浪無頼の者たちの歌うかれらの生きざまを主題にしたレベティカは生れ、その上、レベティカを伴奏するためのマンドリンに似た三弦の小楽器ブズーキ *loutoulouki* が看守の眼を盗んで、容易に隠しておおせるものとして、秘かに創り出され、ここにレベティカとブズーキの不可分の関係が確立されたのである。今日普及している四弦の大型ブズーキは三〇年代後半に

天才的な演奏者が工夫したもので、古典レベティカと同じく、今や全く別物になったと言えるほどのものである。

2 アマン唄とレベティカ アマン唄が古典レベティカ(三〇年代までのレベティカをこう呼ぶことにする)の祖型ないし原基なのである。けれども両者は区別されるべきものであろう。アマン唄の名品と言うべきかどうか分らないが、今なお歌われる有名なひとつを挙げよう。

ΣΑΝ ΠΕΘΑΝΩ ΣΤΟ ΚΑΡΑΒΙ

"Avre, aðu peðáw ti ðá pouve; Iiéðave kávroio
paði;

Iiéðave kí évas iefévtis pou ýnevroioe tñ Coñ
'Aðu! 'Aðu!

"Avre, aðu peðáw otò kapófi, páte me iúe otò
yaði

Nà me páve tà paúpa tà phápa kai tò áqumò
vepò
'Aðu! 'Aðu!

先出のホルストによる英訳がある。それを頼りに試訳すればこの『船で死んだら』の大意は次のようになる。

俺が死んだら 世間の口は 勝手気儘に暮した奴が
一人また消えたと言うだけさ、アマン、アマン。

船で死んだらこの俺を 構わず沖に捨ててくれ 魚と
海水のだし(出汁)になる、アマン、アマン。

これができたのは、一九〇〇年頃という説もあるが、特殊なダンスのリズム(ゼベキコ *Sejmeiko*)に合わされたものである。作詞者は勿論作曲家も判らない。それが、アマン唄ばかりか古レベティカの特徴である。ここにアマン唄からレベティカに至る系譜、とくにこれらの歌を自分たちのものとして作り・演奏し・歌い伝えてきた人たちのドロップ・アウトないしアウト・ローとしての社会史をうかがうことができる。それは無名性ではあっても匿名性ではなかったであろう。

『船で死んだら』は、私も素人がきいてなら、中東の歌と区別がつかないのだが、古レベティカの系譜を尊重する現代のレベティカ作曲家ミキス・テオドラキスの『ピレウスからきた少年』をエジプトの音楽家アハマド・セラウィーは、ナイルの船唄と全く同じで「ナイル

の「子供船方」と変えてもそのまま(エジプトで)通用する、と言ったことを、ホルストのギリシャ語版に増補された部分で、有名な歴史家ブルナス(T. Boupras)が紹介している(p. 179)。レベティカの主題には、酒・女・喧嘩・死・貧困など、暗く退廃的なものが多く、けだるい情念と怨念が重くこもっているのが例である⁽⁸⁾。

『船で死んだら』に明確に打ち出されているところだが、「沖に捨てろ」と言うのはキリスト教会による埋葬を拒絶しているところに注目しなければならぬ。運命の抗し難い力としてのカロス *χάρος* を歌うものであり、それは多神教ギリシャの文化を思わせる。それが、そのまま反権威・反教会・反僧侶になっているのである。そういう例は即座にいくつも拾い出せるけれども、直線的に反政治・反政府になるレベティカの例も少なくなない。『誰が総理であらうとも』(一九三五年)はその典型であろう。(英訳は前出のホルストによる)

ΟΣΟΙ ΓΙΝΟΝΤΑΙ ΠΡΩΘΥΠΟΥΡΓΟΙ

Ὅσοι γινόνται πρωθυπουργοί, ὅλοι τους θὰ πεθάνουν
Τὸς κυνγιάς ὁ λαὸς ἀπ' τὰ κατὰ τοῦ κύνου.

*Πέθανε ὁ Κονδύλης μας, πᾶσι καὶ ὁ Βενιζέλος
Τὴν ποιήσῃς καὶ ὁ Δημοκρίτης τοῦ θάλασσε τὸ
τέλος.*

*Βάλεω ἐποφητεύματα πρωθυπουργὸς καὶ γέω
Νὰ κάθουμαι τεμπέλικα καὶ τρώω καὶ νὰ πίνω.*

*Καὶ ν' ἀνεβαίνω στὴ βουλή, ἐγὼ καὶ τοὺς διατάξω
Νὰ τοὺς παρῶ τὸ ναυτιλὲ καὶ καὶ τοὺς ματσοῦρ-
άξω.*

THOSE WHO BECOME PRIME MINISTERS

Those who become Prime Ministers are sure to
die of it ;

The people hunt them down because of the good
they do.

Our Kondylis died and Venizelos is gone,

And Demerdiz spit when he might have come
up with the answer.

I think I'll be a candidate and get to be Prime
Minister

So I can laze about all day, eating and drinking
like mad.

And I'll stand up in the Parliament and give them
all the orders.

I'll get them on the narghilé and turn them on
together.

3 レベティカの変容

レベティカの主役または主題は、都市下層の「英雄」または夜の「名士」たちである。ホルストはこれに英語の spiv をあてている (p. 14)。言うまでもなく V. I. P. を逆にしたものである。

だがレベティカは三〇年代に幾人かの名手・名作者を出したあと次第に主題と内容を変えてゆく。この時期になると即興性が少なくなり、作者名も明示されることに

なる。だから人によっては、レベティカではなくなった、とも言うのだが、商業主義による変質はギリシャの観光立国化が確立する五〇年代からのことであろう。「レベティカは死んだ」のである。一部の作者も奏者も有名になり富豪になる。一九三四年頃にできたというツイッファニスの Cloudy Sunday などは世界中に知られるようになった。

三〇年代には、レベティカは日本の演歌と同じく、良家の子女が歌うものではなかった。また女性歌手がこの頃から現われるものの、それさえレベティスの女性版というよりはマンガスの女性形デルベドリッサ *Δελφίνισσα* (タベルナ) にせよ未だ婦女子を拒むところであった。レベティスとマンガスの区別については詳らかにしないが、ここでは、前者を定職をもたずそれを蔑視して生きる「余計者」・「遊び人」、後者を硬派の「遊び人」または「親分」衆としておく。こうした存在に革新勢力や革新政党は当然のことながら白い眼を向け、こういう特殊な形で先取された都市の基層文化を理解しえなかった。

だが、第二次大戦という特別な事態が、とくに独・伊による占領という国民的な経験が、レベティカに歌いこまれてゐる情念や怨念を共有させることになった。やがてそれがカルダラスの『月のない夜更け』のような作品になつてゆくのである。

Nýktwos xapís pērtáti, tò akotáti einai baði
Kí ōmos éna palhikáti òu mporéi ná κοιμηθεί.

“*Ágarē ti periménei, ògh nýktra ōs tò πρωί,*

Στὸ στενὸ τὸ παραθύρι τοῦ φωτίζει τὸ κελί;

Πόρ’ ἀνοίγει, πόρτα κλείνει, μὰ δὲτιδ’ ἔναι τὸ κλειδὸ’;

Τὶ ἔχει κάνει καὶ τὸ πῆσαν τὸ παιδί στὴ φυλακή;

Πόρ’ ἀνοίγει, πόρτα κλείνει, μὲ βαρὺ ἀναστεναγμὸ

** Ὡς μποροῦσα νὰ μαντέψω τῆς καρδιάς του τὸν*
καρμὸ.

Night is fallen without a moon; the darkness is deep;
 yet a *palikari* cannot sleep.

Wonder what he is waiting for, all night long
 by the narrow window that lights the cell?

A door opens, — a door closes, but the key is

turned twice;

what's the kid done that they threw him in jail?

A door opens — a door closes with a heavy groan;

if only I could guess the sorrow of his heart.

[Ed. by K. Butterworth & S. Schneider, *Rebetika*
 — Songs from the old Greek underworld. (Athens,
 1975) p. 117 以下。

これは内戦時代（一九四六—四九年）に政治犯によつて作られたものだといふが、『曇りの日曜日』の時代のことでは、ここにひとつの頂点を見ることが出来る。強烈な社会性を帯びたものが現れてくる。そこに著しい変容が認められる。

内戦の時代ほど、三〇年代後半のピークを通過していったとはいへ、レベティカが広く歌われ国民歌謡化した時代はない、とはよく言われるところであるが、その頃に誰にもよく歌われたのは、しかし、政治性・社会性の強いものではなく、古くしかも優しく哀しい愛の歌・母を偲ぶ歌・望郷の歌であった、という。

戦後すぐ「冷戦」の端緒をなし代理戦争の先駆でもあった内戦の時代は、「ドイツ軍に殺されたよりも多い同

胞をお互いが手にかけた⁽⁹⁾時代で、ギリシャ人は全く言葉の通じない二種類の国民に分断されたと言われる。コミュニケーション・ギャップのただ中でも、レベティカだけは共有されたという。それは、言うまでもなく、独占領時代に権力への呪詛をこめてレベティカを子供たちまでが口ずさみ、ドイツ兵への揶揄と抗議にしたあとでの、深い失望と虚無感の中で歌われたものであるだけに、かえってレベティカの本質に深く迫るものでもあったに違いない。

それは、近年、「外国人観光客に占拠されてしまった」古いアテネの一画ブラーカで夏になると演奏される毒をぬいた紛い物のレベティカとは違う。

かつてレベティスが先取りし、次いで第二次大戦中に歌い継がれたレベティカは、軍政時代の禁止命令をかわして亡命し、国外から抵抗をこめた活躍で故国に歌を公然と電波を利用したり、カセットで送りこむなどした現存の作曲家ミキス・テオドラキスの作品の中にその本質をみることができるだろう。

軍政権と交替した新政権にかけた分だけの期待を裏切られた民衆は、今また、レベティカを歌い出している。

ホルストのギリシャ語訳の刊行はそういう状況に対応したものであるし、古レベティカの数々がカセットで売られてもいる。

それが国民的な意味での文化的アイデンティティの掘りおこしと重なっていることは、カラギオジスの再評価の動向にも認めることができるし、有名な詩人の手になる放浪画家セオフィロスの伝記(*O. Filiz, O Zorpidios Oedipos* (1973))にも読みとることができる筈である⁽¹⁰⁾。

- (1) たとえば Calliope Moustaka, *The Internal Migrant* (1964) A. Th. Angelopoulos et al, *Essays on Greek Migration* (1967) B. Kayler, P.-Y. Pechoux et M. Sivi-gnon, *Exode rural et attraction urbaine en Grece* (1971) C. L. Papageorgiou, *Regional Employment in Greece*, 2 vols (1973) 及び Eva E. Sandis, *Refugees and Economic Migrants in Greater Athens* (1973) など。

- (2) 「都市化と人間類型」(思想)一九七二年一二月号のちに「現代アラブの政治と社会」一九七四年に所収)および編著「発展途上国の都市化」(一九七六年)所収の小論「ハイリート誌」を参照してほしい。

- (3) この間の消息を伝えるものとして Marjorie House-pian, *Smyrna 1922—The Destruction of a City—*,

(London, 1972) があつた。

- (4) David Holden, *Greece Without Columns—The Making of the modern Greeks—*. (London, 1972) p. 29 以下 p. 30 ff

(5) Sotiris Spatharis, *Behind the white screen* (New York, 1976) p. 22 など著者 (1898—1974) の手によるギリシャ語版 *Αρσιμηνειάδα* (1960) には接することができなかった。全体は「回想」と「カラギオジスの歴史と芸術」の二部からなっていて、近頃続々公刊されている美術史的・芸術史的な研究よりも私には有益であった。

(6) Gail Holst, *Road to rembetika—music of a Greek sub-culture, songs of love, sorrow & hashish* (Athens, 2ed. 1977) p. 24—25. なお著者はオーストラリアの音楽ジャーナリストでハープ奏者であるが、一九六五年にギリシャを訪れレベティカに注目するようになった。六年には「中産階級に属する教養あるギリシャ人とは」レベティカについて話すことができないことを知ったが、(7) 六八年には前年の軍政権成立という事情もあって同国を離れ、同国が女史の入国を許さなかったこともあって、かえってオーストラリアのギリシャ移民のなかに名ブズーキ奏者や沢山の古レベティカ・レコード盤を発見することになった。七四年に軍政権が交替したのち再びギリシャに戻って『レベティカへの道』を出版するが、七七年にはギリシャ語訳 *Δοίμος γὰρ τὸ περνετικόν*——が刊行されて

いる。初版にはさけ難い印刷上のミスは二版では訂正されている他に、著者の採集・再生による古レベティカ歌詞が初版ではローマ字表記であったが二版ではギリシャ文字表記に改められている。なお、ギリシャ語訳は、英文版の文献に代って当代ギリシャの学者たちによる主要なレベティカ論を一七篇も収めている。したがってページ数も歌詞の英訳を省いた上で大幅に殖え二五三ページになっている(英訳は一七五ページ)。

- (7) G. Holst, op. cit. p. 36

(8) この点の分析は *Στάθης Δαμανάκος, Κοινωνολογία τὸς περνετικόν* (1976) が詳しい。なお、ホルストが高く評価する O. Revault d'Alloues, *La création artistique et les promesses de la liberté klincksieck* (Paris, 1973) は利用できなかった。

- (9) D. Holden, op. cit., p. 59

(10) 本稿全体にわたる重要なヒントと激励は共同研究のメンバーである各氏とこの春来日したベック教授の講演および著作(渡辺金一訳「ビザンツ世界の思考構造」)から与えられた。

〔附記〕現地調査では渡辺金一・中村喜和・松木栄三・竹内啓一の各氏ならびに平島彬伸氏・石田智子嬢には資料と情報の蒐集その他で大変お世話になった。他にお名前を挙げるとご迷惑になることがあるかも知れない

方々にも一方ならぬお世話になった。その上、アテネの「フィロティ村協会」の活動について分析するという私の任務を、この論文ではついに果せないでしまった。ギリシャ班の各氏には全く申訳が立たない。それは全て私の非力の故である。記してお詫びに代えたい。

(アジア経済研究所調査役)

* 本稿は昭和五十二年度科学研究費補助金(海外学術調査―現地調査)「地中海の島嶼における文化交流の影響」および昭和五十三年度科学研究費補助金(海外学術調査―調査総括)「地中海島嶼における都市・農村生活の構造の分析と島嶼及び外部社会の交渉の機構の研究」による研究成果の一部である。